私の履歴書

前橋汀子 ⑱

帰国

潮田さんはコンクール入賞のお土産を持って1963年に一足早く帰国したのだが、私はもう少しソ連で勉強を続けることにした。

思えば、私が留学していたのは、東西冷戦の緊張が一つのピークを迎えた時期だった。留学2年目にキューバ危機があった。留学する直前にはキーロフバレエのスター、ルドルフ・ヌレエフが亡命している。ソ連にとっては大事件で、キーロフ劇場の関係者もぴりぴりしていた。

あの頃は全く考えたこともなかったが、日本人の私も西側の人間だ。にもかかわらず、当時のソ連の人たちは誰もが親切に接してくれた。今でも感謝の念で胸がいっぱいになる。

64年夏、私は極東のナホトカを出て横浜に向かう船に乗った。東京オリンピックに出場する選手や関係者がたくさん乗っていた。私の帰国はちょうどそんな時期だった。

徐々に舞い込んだ本業

当初はお茶くみや通訳も

3年ぶりに帰国した無名のバイオリニストに、演奏会の仕事が簡単に入ってくるはずもない。そんな私を心配してくれたのがチェロの巨匠ムスティスラフ・ロストロポーヴィチだった。東京・虎ノ門に事務所のあった新芸術家協会に入れるように、推薦状を書いてくれたのである。

彼はモスクワに住んでいたのだが、月に1度はレニングラード音楽院にチェロを教えにきていた。私は何度も授業を見学にいった。それですっかり親しくなっていたのだ。

新芸術家協会は東側の演奏家を招いていた音楽事務所で、私は毎朝、虎ノ門まで出勤した。演奏家として入ったはずなのに、演奏会の仕事はなく、お茶くみばかり。ロシア語が分かるから来日したロストロポーヴィチの通訳を任されたこともある。

ラジオやテレビドラマの音楽を演奏する「劇伴」のアルバイトもやった。間宮芳生さんや矢代秋雄さん、武満徹さんらの曲を弾くのだが、当日スタジオに行っても譜面が仕上がっていないということもあった。朝丘雪路さんや高英男さんが歌うシャンソンの伴奏をしたこともある。今風にいえばスタジオミュージシャンをやったわけだ。

それから現在も所属するKAJIMOTO（当時は梶本音楽事務所）に入った。ソリストとしての仕事が次第に増えていった。

東京でロストロポーヴィチ㊨と

東京でアントニー・チューダー・バレエ特別公演が開かれた時は、岩城宏之さんの指揮で東京フィルハーモニー交響楽団が演奏した「リラの園」のソリストを務めた。65年夏のことだ。終演後、私のファンという俳優の方が楽屋を訪ねてきた。「伊丹です」と言われても、しばらく日本を離れていたから誰なのか分からなかった。この後、伊丹十三さんはドラマの光源氏役が当たって大変な人気者になる。

趣味でバイオリンを弾いた伊丹さんはたびたび私のコンサートに来てくださった。私もお宅を訪ねるようになった。

伊丹邸は有名人のサロンと化していて大島渚さんや黒柳徹子さん、かまやつひろしさん、村松友視さんをはじめ、映画やテレビ、出版界の個性的な人々が集まり、いつも知的な楽しい話で盛り上がっていた。

その面々が、私にバイオリンの名器を持たせようと話し合ってくれたらしい。ある日、伊丹邸のトイレに「前橋汀子さんにストラディバリウスを」と書いた募金箱が設置された。（バイオリニスト）

掲載日 2018年10月19日 日本経済新聞 朝刊 40ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。